

学問の無常なること：「クラシック」と「バロック」をめぐって

著者	伊地智 均
雑誌名	仏語仏文学
巻	22
ページ	1-10
発行年	1994-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017402

学問の無常なること

—「クラシック」と「バロック」をめぐる—

伊 地 智 均

大仰なタイトルでいささか気恥ずかしいですが、要は学問研究の世界でも、流行り廃りの現象が大いにみられるということの一例をここにお話ししたいと思います。

さて、私の発表を、先ず一篇の研究論文の紹介から始めたいと思います。それは今から半世紀以上も前にひとりの日本人によって書かれたものです。すなわち、林達夫の「古典主義と合理主義—ボワロー『詩学』に寄せて—」という論文で、雑誌『思想』151号、1934年12月号に載っています。林は1934年8月に、丸山和馬氏による、ボワローの『詩学』の翻訳が、岩波文庫の一冊として公刊されたのを機に、上記の論考に着手したのです。林はこう書いています。ボワローの『詩学』、

この書は、人々の言う如くヨーロッパ古典主義文学について与えられた最高の理論的表現であり、従ってその指導原理を示した唯一無二の指針書とも見なされていた古典的文献であるが、今、その良心的な忠実な翻訳が、詳細、懇切な注釈を伴って刊行されたことは、我が国の文学研究者にとっての大きな喜びである。私のこの小論はこの邦訳刊行を機会に少しばかり進めることのできた私の考究の一部である¹⁾。

ところで、この論文は、丸山氏が『詩学』の解説のなかで、

ボワローの功績は、この〔フランス古典主義作家に見出される〕文芸思想をデカルトの所説と結びつけることによってそれに哲学的根底を与

1) 私が手許でみているのは、『林達夫著作集2 精神史への探究』、平凡社、1971年所収の同論文、pp. 169-196 である。

え、もってクラシシズムの基礎を強固にし、その伝播をより容易にした点にあるのである。²⁾

ということに対する反論ともいえるのです。いいかえれば、『詩学』は文学と詩歌との『方法叙説』であるという説に対して、林は反論を試みたのです。この反論を今ここで要約しますと次のようになります³⁾。

丸山氏の見解はつまるところ、フランシスク・ブーイエとエミール・クラントツの見解の一種の踏襲である⁴⁾。たとえば、ブーイエはいう。「…ボワローは……新哲学（デカルト哲学）の公然たる擁護者であった。詩を良識と理性とに引き戻そうとする彼の教訓のうちに、人はデカルト主義の精神を認めないであろうか。……ボワローは『詩学』の中で、科学においてと同じく文学において、デカルト主義が到るところで持ち上げたところの方法のあの精神、論理のあのすぐれたる教訓によって鼓吹されている。『詩学』は、言ってみれば、文学と詩歌との『方法叙説』であったのだ。」さらに続けて彼はいう。「詩歌そのもののうちにさえ、人はデカルト精神の影響のある痕跡を見出すことができる。人はしばしばルイ十四世の世紀の詩人たちが自然の感情を有していないと非難してきた。そして事実、たとい感受性や想像力はたしかにコルネーユやラシーヌに欠けてはなかったにしても、彼らが一般的に言って自然の美しさによって感動を受けることかなり僅少であったらしいことは認めざるを得ない。それは、自然から靈魂と生命とを剥奪してそれを一つの大きいなる機械にしてしまうことによって、彼らのうちにこの感情を弱めるところのデカルト主義の影響ではないだろうか。ルイ十四世の世紀の詩人たちは、思うに、デカルトのこの

2) ボワロー『詩学』、丸山和馬訳注、岩波書店、昭和12年（第5刷）、p. 18。（岩波文庫 1039）

3) 参照、林達夫、前掲論文。

4) Cf. F. Bouillier C., *Histoire de la philosophie cartésienne*, 1854. (3^e éd. Delagrave, 1868. 2 v.)

Cf. E. Krantz, *Etude sur l'esthétique de Descartes*, Baillière, 1882. 376 p.

機械論メカニズムを通してのみ自然を見たのだ。そこからして、自然が彼らの想念のうちに占める些小なる地位。そこからして、最後、自然にかかり合わせる必要があるとき、彼らがそれを描写する無味乾燥さ。」なお、さらにブーイェはいう。「デカルトの例に倣って、十七世紀の文学は、思想と同じく、生命と感情とを人間だけのうちに集中した。」このように長々と、林はブーイェを引用しつつ、次のように要約しています。すなわち、「十七世紀フランス文学における一切をデカルトに帰し、そのあらゆる特徴をデカルト主義的方法と教説との主要命題の直接の且つ必然の帰結としてそれに結びつける」クラントの『デカルト美学に関する試論』(1882年)の基本的テーゼは、このように、すでにそれより30年ほど前に著されたF. ブーイェの『デカルト主義哲学の歴史』(1854年)の中に明確に見出されるものである。従って、このような見方を、ブーイェ＝クラント的テーゼと呼ぶことができ、丸山氏はまさにこのテーゼを忠実に踏襲したのであると。

ところで、丸山氏に反論する林はというと、彼もまた、忠実にG. ランソンの所説に従っています。つまり、ランソンの「フランス文学に対するデカルト哲学の影響」という、1896年刊の『メタフィジク研究』誌上に掲載された論文に全面的によっているのです⁵⁾。ランソンと共に彼のいわんとするところは、デカルトを17世紀フランスの古典主義的精神の唯一の普遍的原因とする考え方は、「ボワローの詩論の成立に参与したところのほかの一切の要因を無視していること、デカルト学説とボワロー詩論とのあいだの一切の類似アナロジーないし符合コンコルダンスを一つの親子関係フィリアシオンに作り上げていることにある」ということとなります。

もう少し詳しくみてみましょう。デカルトの影響を正しく評価するためにランソンと共に林がいう要点は次の3つです。まず第一に、デカルトと

5) Cf. G. Lanson, *L'influence de la philosophie cartésienne sur la littérature française*, dans la *Revue de Métaphysique*, 4: 517-550, 1896 et dans les *Etudes d'histoire littéraire*, Champion, 1929, pp. 58-98. さらに参照、林達夫、前掲論文。

ボワローが同じく「理性」という語を到るところに君臨させていても、語彙の同一性は必ずしも観念の同一を含んでいるとは限らないということに用心すべきである。ボワローが「理性」という言葉によってデカルトと同じものを解していたかどうかはア・プリオリには明らかでないのであるからと。

次に、古典主義文学の一般的特性をデカルトの影響に帰すことは避けるべきである。たとえば、この文学は驚くべく秩序づけられているが、この秩序は果たしてデカルト的原理の結果の一つか、ギリシャ＝ローマ的技法の遺産の一つかどちらであろうか。デカルト的方法でなくとも、ホラティウスの明快な秩序 (lucidus ordo) によってでもそれに到達することができるのは確かである。

第三に心理的分析が17世紀文学のあらゆるジャンルで大きな場所を占めているからといって、これがデカルトの物心二元論の影響、すなわちデカルトが精神と物質を分離し、精神の内部的世界の方が物体の本性たる延長の外部的世界よりも認識するのが容易であると宜したことが、古典主義文学の心理的分析の直接的な生みの親、原因であるのかどうか問題である。心理的分析という現象を説明する原因はデカルト哲学以外になんと多くあることか。

かくて、デカルト主義と古典主義文学との関係を研究するには、単なる適合、調和、並行、類似であるものと、真の原因結果の関係であるものと峻別しなければならない。さらに古典主義文学とデカルト哲学とが同一のある影響を共通に受けていることもありえるかもしれない。このように論を進めながら、ランソンは次のように結論する。その部分を林は以下のように紹介しています。

「十七世紀のはじめ、フランスにおいて、各方面に、知的独立の極めて断乎たる精神が顕われてきた。それは無政府的なものの反逆的なもの何もない、アヴァンチュールと空想とからひどく懸け離れた、秩序と理性とをひどく欲しががる精神である。人はもはや思想の思い切った放浪に対する好尚をもたなくなった。世界と書物とを通じて気晴らし的なあるいは大胆な新

趣向を求めなくなった。人の欲するところのもの、それは明晰な真理であり、確実な論証である。正しく把握し、正しく導いてゆく、それが各人のなさんと努めるところである。かくてデカルトの方法は、(中略)あらゆる同時代人に一定の度において共通であった知的要請の直接所産であったのだ。そのようにして、我々がここに両者において見るのは、根本的には^{コンコルダンス}符合であって影響ではない。「時代精神」こそが両者の共通的特徴の共同的地盤なのである。」

さらに林は、ランソン著の『ボワロー』⁶⁾の中から同様の趣旨の文を引用し、次のように翻訳、紹介しています。

「忘れてならないことは、『詩学』はデカルト以前に始まる一つの進化の到達点であり、従ってその影響の範囲外にあることである。それは古典主義精神の完全な表現であり、このものはその起源をもその原因をもデカルト精神のうちには存していない。却って古典主義精神とデカルト精神とは一つの同じ原因、……十七世紀の初頭に形成せられたある一般的精神の二つの並行的結果、明白に相異なる二つの表示である。」

林はランソンを翻訳し、祖述し、丸山氏が「一種の再生産を」したブーイエ＝クランツ的テーゼを見事に論破しています。「史実的に見て正しいと立証し得られるのは、後者(ランソン)の見解であると思われる。そして事実、今日、多少とも権威あるすべての古典主義研究は、例外なくこのランソンの立場に立って、その史的研究の歩みをすすめているのだ。」と断言し、R. ブレーの『フランスにおける古典主義理論の形成』(1927年)やD. モルネの『フランス的明晰の歴史』(1929年)を例として挙げています⁷⁾。

私はここで、林の丸山批判やランソンのブーイエ＝クランツ的テーゼ批

6) Cf. G. Lanson, *Boileau*, Hachette, 1892. 207 p.

さらに参照、林達夫、前掲論文。

7) R. Bray, *La formation de la doctrine classique en France*, Hachette, 1927. 389 p.

D. Mornet, *Histoire de la clarté française*, Payot, 1929. 358 p.

判の内容を検討するつもりは毛頭ありません。ただ、林が丸山氏を批判するのに、1854年刊のブーイエと1882年刊の克蘭ツの二研究書と1896年刊のランソンの論文を詳細に比較検討していることに興味を抱くのです。まことに見事に日本の知識人の典型をここにみる思いがするからです。すなわち、林が丸山氏を、ちょうど、あなたの依拠している参考文献はもう古いですよ。今日では私の挙げた書がいちばん新しく、まちがいのないものなのですと、断罪しているように思えるのです。まさに、西洋の学者・研究者、知識人の所説、学説をいち早く、正確に紹介することを主要な務めとした、秀れた日本の知識人の姿をここにみないでしょうか。

ところで、フランスでは17世紀フランス文学は、これまで伝統的に「クラシック（古典主義的）」の文学として総括されてきました。しかし、17世紀も前半の文学はことに秩序、規則、理性、整合、節度、規範などを表象する「クラシック」という語で一枚岩としてまとめられるほど単純なものではありません。歴史的にみて17世紀前半のフランス社会は、不安定、動揺の渦中であって、政治的、宗教的騒乱が相つぎ、そこに生きる人間の運命の移り変わりが激しく、人生は移ろいやすく、定めなかったのです。従って、この時代の文学を定義づけるのに「クラシック」という語は適切なものではなく、変転、動揺、変幻、異様、残酷、複雑・錯綜、混沌などを表出する「バロック」という語が考え出されたのです。「クラシック」という語は19世紀はじめには用いられていましたが、「バロック」の方は20世紀半ばごろに使われはじめました⁸⁾。不幸なことに第二次世界大戦のため、フランスの学界事情が直ちに日本によく伝わりませんでした。わが国の学者・研究者、知識人も戦後十年ごろになって、ようやく17世紀フランス文学を、とくに17世紀前半のそれを、「バロック」文学としての特徴をもつものとして考えはじめました。わが国における17世紀フランス文

8) 参照、田辺保編『フランス文学を学ぶ人のために』、世界思想社、1992年所収の田辺保著「I フランス文学の流れ」および拙著「Ⅲ 1 バロックからクラシックへ」

学研究者の同人研究誌『フランス十七世紀文学』I号は1966年に発刊されていて、その発刊の辞として、杉捷夫氏が「バロックのこと（発刊の辞にかえて）」を著わしているのは象徴的なことと思われます。杉氏はそこでこう書いています。「渡辺明正氏が『バロックについて』という研究報告を行なったのは、1954年春中央大学で行なわれた日本フランス文学会総会の研究発表の席だった。（中略）これが、恐らく、バロックについて、日本での最初のまとまった積極的な発言ではなかったかと思う。たまたま学会誌の同じ号に、岩瀬孝氏の『フランス演劇のモチーフとしての超自然』という論文がのって居り、同氏もこの論文の中でルベグ教授の業績を踏まえながら、16世紀末の演劇の傾向の一面であるバロックに触れて居られる。この論文も、前年秋の学会で発表されたものである。」⁹⁾

ここで問題となっているルベグ教授の「フランスにおけるバロック演劇」という論文が発表されたのは大戦中の1942年のことです¹⁰⁾。私が今、手許において参照しているのはルベグの著書『フランス演劇研究I, II』の二巻本で、1977年と78年に発刊されていて、その中に上記の論文が再録されているのです。それによってルベグの所説を以下に簡条的に要約してみましょう¹¹⁾。

1. まずこの論文を再録した理由として、この論文は、そこでパリ大学の教授がはじめて「バロック」という形容詞を、フランス文学の一部分、すなわちルイ十三世の世紀の文学に適用したという記念碑的論文であることが述べられている。2. 文学上のバロック様式は多様な傾向、時代、作家がそれに加えられて大いに増殖した。ラシーヌ、デカルト、ボシュエといったわが国の古典主義作家もそこに入るし、ロンサール、ラブレー、

9) 『フランス十七世紀文学 I』, フランス十七世紀文学研究会発行, 1966年所収の杉捷夫著「バロックのこと（発刊の辞にかえて）」p. 1.

10) R. Lebègue, *Le théâtre baroque en France*, dans la *Bibliothèque d'humanisme et renaissance* 2: 161-184, 1942 et dans les *Etudes sur le théâtre français* I, Nizet, 1977. pp. 340-360.

11) Cf. Lebègue, pp. 340-344.

さらに聖史劇もそれに加わる。3. 1580年から1660までの間に創られた最高に古典主義的な文学作品だけを検討すれば、そこにはたしかに、心理的文学、節度、よき趣味、理性への直線的な進化・発展が見出されるが、「クラシック」というラベルがまったく適合しない作品もほかに多く存在する。このような作品は今のところそんなに人に知られてはいないが、これらの作品の作家を、ランソンが「プレジュー (les précieux)」や「ビュルレスク (les burlesques)」の二流派の人たちを反体制派 (des dissidents)、時代遅れ (des attardés)、脱線者 (des égarés) と呼んだように呼ぶことは、完全に不正確で不当なことである。むしろ、なぜ、そのような作品にバロック小説、バロック詩、バロック演劇などの名を冠さないのか。

4. ルベークが用いるまでは、いかなるフランス文学史においても、「バロック」という語は使われていない。数多くの著作、言説は競ってこう繰り返す。すなわち、フランス人は概してデカルト主義者で、なによりも明晰と理性を最高位におくと。5. バロック的と考えられる諸傾向、諸特徴を一つずつ定義することから、われわれの研究をはじめるのが賢明な仕事の手順である。たとえば、文学創作では自由を好むこと、逆にいえば、規則、節度、礼節、様式の峻別などを軽視することがバロック的なのである。さらにバロック的性格とは非合理的であること、すなわち、論理性や理性が欠如する気晴らし、自然の魅力、神秘、超自然への趣好と感情や情念のほとばしりに身をゆだねることなのである。6. ルイ十三世の世紀では貴族には傲慢や野心がみられ、同じく都市住民 (ブルジョワ) においても、もろもろの欲望の発露や道徳にわずらわされない自由奔放な態度がみられ、理性・良識のもとに従属することを拒み無政府的無秩序に生きている人が多くいたのである。

以上が、ルベークの記念碑的論文の要約であります。「十七世紀のはじめ、フランスにおいて、各方面に、知的独立の極めて断乎たる精神が顕われてきた。それは無政府的なものの反逆的なものの何もない、(中略) 秩序と理性とをひどく欲しがらる精神である」と、林がランソンと共にいった、あの「時代精神」とはまったく対蹠的な時代精神の出現がルベークによっ

て描き出されているのです。林がランソンのテーゼによって丸山氏を批判したことは先に述べましたが、ここにルベグのテーゼが現われ出たことによって、丸山氏を批判した林もまた批判の対象となるのです。どちらにせよ、十七世紀フランス文学を「理性」の一枚岩のもとにまとめることはもはや不可能ですし、正しいことでもありません。

予定の時間が迫ってきましたので少し端折って、現在の状況について話をしますと、1992年発刊の学生向きのフランス文学史¹²⁾では、「バロック」という語は、以前ほど使われなくなったと書かれています。なぜかという、*「人が古典主義 (le classicisme) についてあまりにも単純きわまりない観念を抱くことを断念した」*から。つまり、前述しましたように、明晰と理性の支配のもとにある古典主義という概念は変化し廃れたのです。語は生き残り、その意味内容は変化し「バロック」という語の領域まで広がったともいえるでしょう。さらに「クラシック」という語は1660—1680年のフランス文学作品にしばしば適用され、また、かなり頻繁に1630—1700年のフランス文学作品に適用されていて、以上このことはフランスの大学という学界の伝統がうちたてた取りきめごとであると同時に、十七世紀の作家のすべての心中に抱かれた、時代の事業へ参加するという共通の意識を考慮すれば、「クラシック」という語はまさに歴史的に正当な表示であると記述されています。もはやここでは、「クラシック」と「バロック」の相違、対立はルベグのテーゼにみられるほど強調されていません。それどころか、「バロック」の勢いは昔日のものではありません。

以上すすめてきた発表の教訓と結論はつぎのようなものです。

1. 林達夫のような偉大な日本の知識人も、結局はフランスの大学人で碩学の G. ランソンの直接の影響下にあり、その所説を忠実に紹介することによって、時代遅れとみられたブーイエ＝クラントツ的テーゼとその紹介

12) R. Zuber, *Littérature française du XVII^e siècle*, P. U. F., 1992. Collection Premier Cycle, pp. 414-415.

者丸山和馬氏を批判しています。彼はランソンと共に「古典主義的」精神、つまり理性と規則・秩序尊重は時代の精神と主張しています。

2. しかし、ちょうど第二次世界大戦によって、この世界を理性と良識の一枚岩のもとにみるものが不可能になり、西洋の良識が崩壊したのと符合するごとく、大戦中の1942年にR. ルベークがバロックの17世紀を唱えました。つまり、実際にはフランス十七世紀は分裂していて、クラシシズムとバロキズムの二つの要素をもっていたのです。そして、林ほどの才能をもってしても、その時点では、十七世紀フランス文学をそのようにとらえることはできなかったのです。そこに西洋の文化の受容にかかわる日本の知識人の悲哀がみられないでしょうか。

3. 「クラシック」と「バロック」の相克の歴史が現今、1992年の時点で、どうなっているかはすでにみた通りです。このことから明らかになるのはつぎのことです。私たちがフランス文学研究をいつまでもフランスでのそれを一刻でも早く忠実に紹介、踏襲するかたちで続けるなら、宗主国が変れば私たちも変る、変らざるをえないという、いわゆる学問研究の無常、悲哀をつねに味わい続けねばならないということになります。そして、それを避ける唯一の方法は、私たちが直接、文学テキストに対峙し、その読解をつくりあげることだと思ふのです。

(平成4年度 関西大学文学部共同研究助成金による研究の一部である。)

(本学教授)